

P4C Japan 7 月ミーティング記録

日時：2017年7月1日土曜日 17:30～

場所：いしばし哲学堂

参加者：社会人 2（内 1 名提題者） 大学教員 1 大学初等教育教員 3 院生 2
NPO 代表 1 中等教育教員 3（内 1 名記録）

内容：0.参加者自己紹介

1.いしばし哲学堂について

2.p4c 実践経験から「ズレとズレの間で考える」

3.対話

4.最後に（今まで発言しなかった参加者から一言）

提題者：菱田さん 資料：別添 PDF

記録：辻村

（○＝提題者 ←＝参加者）

0.自己紹介

近況などを中心に自己紹介

1.いしばし哲学堂について

発表資料（別添）をもとに「いしばし哲学堂」の取り組みについて提題者から説明

（事業内容／開業にいたる動機の詳細は、別添資料「事業計画書」を参照してください）

○1 時間から 1 時間半の対話

○教材を使うと誘導するような感じになる

←教材があるとねらいを持つようになる。そこに持って行くかどうかを考えるようになる。

○プレーンバニラによって対話の「問い」（トピック？）を決めるのが最近はいいのかなあと思っている。

○対話を通して自分も考え直したい。

○子どもとの対話で、普段のコミュニケーションでしていること／やらなければいけないことを**排除する**ことも考えている。

※記録者感想

：哲学的対話ではなく p4c（子どものための哲学）を選択した理由の一つとして述べられた「Safety」について

参加者が安心していられる状態とは、
「参加者一人一人が個人レヴェルで安心していうこと」である。

という提題者の指摘は新鮮に感じられました。

教員である「記録者」は
「場」の「Safety」は、
参加者が「安全に対話できる場」を創造することに「留意する／留意させる」という「場」の構成員（≡教師）の協同的行為によって
うまれる「Safety」。
と
思っていて、
「個人レヴェルの安心」
ということにまで考えが及んでいなかったことに
気づきました。

2.p4c 実践経験から「ズレとズレの間で考える」

(資料「石橋だより②」～ズレとズレから考える－別添 PDF 参照)

○自分では「上手くいかなかった回」と思っていた事例の紹介－「ピアノの例」

「異年齢の集団で p4c をしたこと」によって生じた「ズレ」

保護者からは「この経験後、(1年の子が) 兄の話をよく聴くようになった」という感想を得る。

←対話の中でその変化を捉え、「よく聴いているね」という感想を告げることは、その児童(生徒)が、
対話のスキルを獲得する契機となる。

←論理世界を異にする「存在」どうしの「対話」では、必ず「ズレ」は生じる。

3 対話

←ズレをラッキーと思うことの重要性。(対話の幅が広がる／抽象度が上がる)

ズレを(もう一度)ズラす。

←「どうして泣いているの?」という題で絵本に拠る 1 年生の p4c 授業中、教室に他クラスの発達障害児童(知的年齢 2.5 歳という評価)が乱入。

5 人くらいが自分の意見を述べた後に挙手。**身体の大きな“ジャイアン”みたいな男の子がボールをその子に渡した。**

「先生におこられたから泣いているの」と述べる。

(対話に参加し、自分の意見を経験に基づき述べた)＝状況の理解と参画

←障害のある児童は輪になることだけでも楽しいのかなあ。と、思うことがある。

p4c の授業では、自閉症の児童／生徒も他者にボールを渡せるようになる。

←ズレを表明する。(＝ADHD の生徒が自己開示の手段として)

4.最後に(今まで発言しなかった参加者から一言)

←(仕事を終えての参加だが)

3 人のチームで仕事をしている。

打ち合わせ時に、リーダーが自分の観点を述べるが、リーダーの意図するところが「ズレ」と感じている同僚。

その二人のコミュニケーションを客観的に観ている参加者は、実際の作業時にこの「ズレ」をどのように処理すべきかと困惑している。

←インクルーシブ教育への活用可能性

「ズレ」と「(対話のトピックと)関係のない発言」の違いは?

←(大きく「ズレ」ている)発達障害と思われる行動をする生徒(保護者が診断を拒否しているため発達障害としての対応ができない)の「問題行動」で過去に経験したことの無い大変な状況下にある。

←修論において社会科と枠組みで p4c (その「ねらい」)どのように論じるべきかが難しい。

←論じたいように論ずればよい。(というアドバイスが複数の参加者からあった)

←図工という教科特性＝「ズレ」を認めなければ成立しない教科である。

以上